（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　森　正人

本論文は、古代中世の物語を総体として把握する構想のもと、〈物語の場〉に注目し、これを表現に内在する〈場の物語〉という観点から諸物語の表現の機能を分析したものであり、ⅠからⅨに区分された計十九の論考と、前書き・後書きより構成されている。

まず前書きとⅠでは、〈物語の場〉を視点とする本論文全体の方法が示される。物語とは四つの形式に分類される〈物語の場〉をもつものであり、『宝物集』などはこれを本文化した〈場の物語〉の典型と捉えられ、この〈場の物語〉の観点からすれば『三国伝記』の説話配列には唱導における三話列挙と自由な物語展開の二系列あることが明らかとなり、のみならず語られる世界と語る世界が交錯するような中世文学作品の特質を浮き彫りにしうると論じる。Ⅱは『堤中納言物語』「このついで」を〈場の物語〉として分析し、過去の作品を変形して作品化する方法をもつことを指摘する。Ⅲは『大鏡』について論じ、同書の〈物語の場〉が『法華経』の叙述方法を踏まえつつ昔物語を再現することを根拠づけていること、「鏡」と称される大宅世継や夏山繁樹は雲林院の神仏の化身であり、語り手は芸能の翁の「もどき」であること、また題号『大鏡』と仏典・漢籍との関係およびこれが『今鏡』成立以後の呼称であることを解明する。Ⅳは『今鏡』につき、その語り手が『玉造小町壮衰書』を受けつつ弥勒菩薩の化身として造形されていることを明らかにする。Ⅴは『無名草子』を対象とし、その発端部の場および述主である老尼の設定が、王朝的、物語的空間への巧みな導入となっていること、その〈物語の場〉が「定め」の場であり、判者を欠くそれは常に読者の判の機会を保障していると指摘する。Ⅵは仏教説話と場の関係を論じ、説法の場が内省的な人間観をもつ説話を育む場となったこと、および『百座法談聞書抄』に関し、元の説話の意味の実現を強制し固有の機能のもとに位置づけている具体相を明らかにする。Ⅶは『今昔物語集』につき、表現と編纂を媒介する「説話行為」の機能を論じる。Ⅷは『宇治拾遺物語』論で、説話を意味から解放し編纂主体を消去するその方法や、価値を相対化し読書行為への反省を促す機能、多様な言語遊戯によって具体化される語りの方法について論じる。Ⅸは絵と物語の相関につき、屏風の絵と歌は相互に働き掛け合う機能をもつこと、また『道成寺縁起絵巻』を通じて、とくに「絵解」の言語機能の重要性について明らかにする。

本論文は、独創的な視点から中古中世の物語通有の表現機能を論じ、なおかつきめ細やかな読解によりその視点と方法の有効性を証しており、研究史上高く評価できる。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。